

唐古・鍵 遺跡

Vol. 2
-土器編-



田原本町教育委員会

弥生土器とは

今から約2300～1700年前の弥生時代に使われた土器のことです。

弥生時代の遺跡を発掘すると、土器や石器、木製品など当時の生活用具類がたくさん出土しますが、特に多いのが土器です。唐古・縄遺跡からも大量の弥生土器が出土し、様々な形や文様を施したもののがみられます。この時代の土器は、お米などを煮炊きする壺、貯蔵に使う壺、盛りつけに使う高杯・鉢など、それぞれの用途に合った土器が作られました。とりわけ、貯蔵の器である壺の存在は、農耕文化としての弥生時代の性格を象徴しています。

日本では、今から1万年前の縄文時代から土器が使われるようになり、この時代に使われた土器を縄文土器といいます。縄文土器は、立体的な造形で飾られ、極めて装飾的なものが多くみられるが、縄文時代の終わり頃の西日本では装飾の少ない土器へと変化し、弥生土器の登場になります。唐古・縄遺跡でもごく僅かですが、「縄文晩期」の土器が出土しています。



最初の弥生土器のセット

土器 考古学では、土を焼いて作った陶器のかかっていない素焼きの器のことを指す。胎楽のかかっているものは陶器といい、カオリンという白い石を碎いた粉から作り、1200度の窯で焼いた器を磁器という。今からおよそ1万年前、火事などの偶然から、土を焼くと固くなることに気づいたとみられる。この土器の発明により、ドングリなどの木の実も食べられるようになった。また、煮ることで、肉や貝などもある程度の保存が可能となった。その結果、人口は急増し、生活も豊かになった。

古墳時代以降の野焼きで焼かれた「赤燒土器」を土器と呼び、縄文土器や弥生土器と同系統の土器です。特に、小型精製土器や壺など、広い地域で類似した土器を用いるようになります。



縄文晩期の「壺（深鉢）」



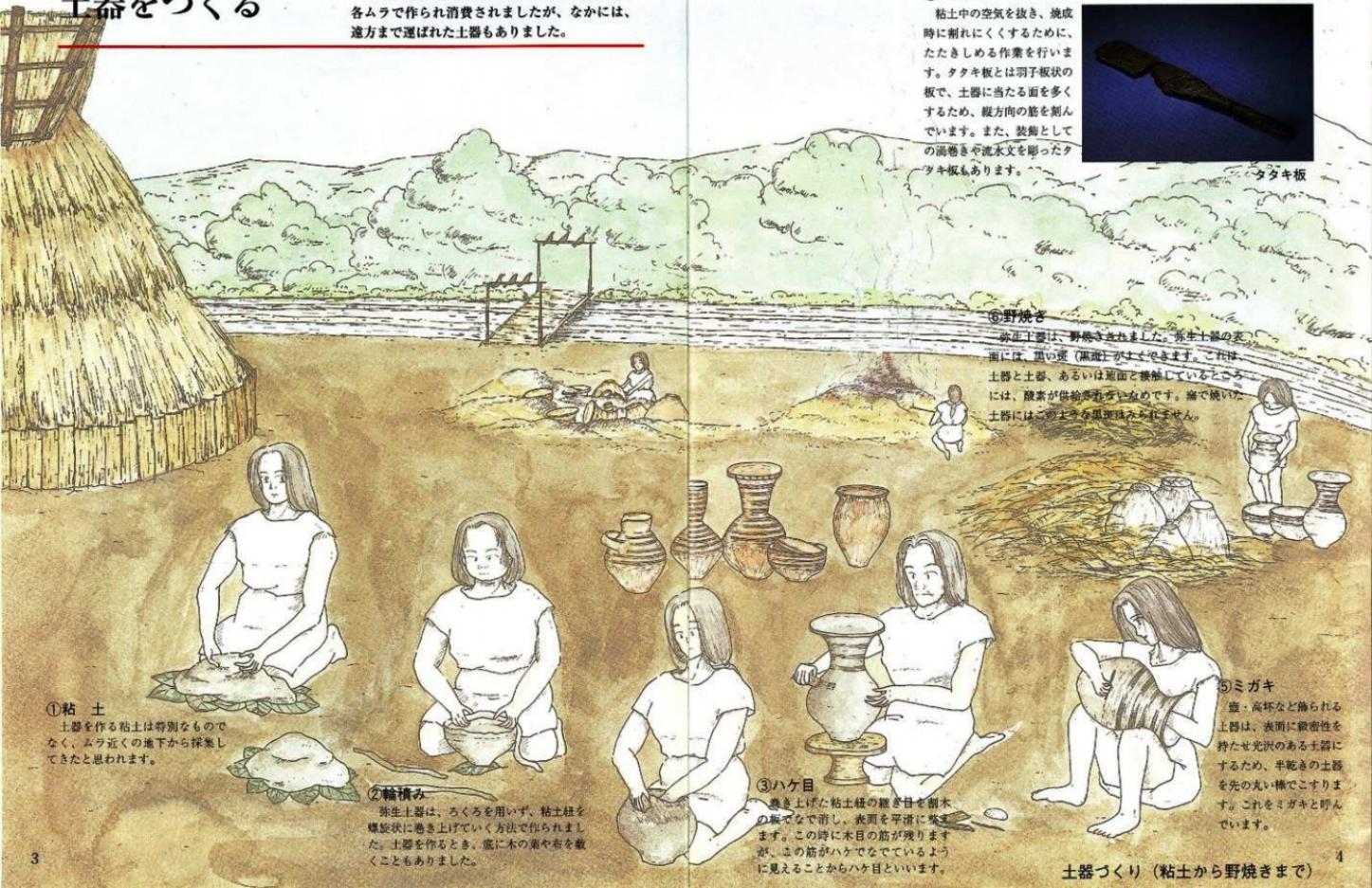
縄文晩期の壺



古墳時代の土器（土師器）のセット

土器をつくる

土器づくりは女性の仕事と考えられています。各ムラで作られ消費されましたが、なかには、遠方まで運ばれた土器もありました。



④タキ

粘土中の空気を抜き、焼成時に割れにくくするために、たたきしめる作業を行います。タキ板とは羽子板状の板で、土器に当たる面を多くするため、縦方向の筋を刻んでいます。また、装飾としての溝巻きや流水文を彫ったタキ板もあります。



タキ板

⑤野焼き

你生土器は、野焼きされました。你生土器の表面には、黒い皮(焦げ皮)がよくできます。これは、土器と土器、あるいは土器と接触しているところには、酸素が供給され難いためです。燃で焼いた土器にはこの土器を黒泥(くろづち)といません。

焦げ皮

①粘土

土器を作る粘土は特別なものではなく、ムラ近くの地下から採集してきましたと思われます。



②輪積み

你生土器は、ろくろを用いず、粘土紐を螺旋状に巻き上げていく方法で作られました。土器を作るとき、底に木の葉や布を敷くこともあります。



③ハケ目

巻き上げた粘土紐の縦き目を削木の板などで削し、表面を平滑に整えます。この時に木目の筋が残りますが、この筋がハケ目でなっているよう見えることからハケ目といいます。



⑤ミガキ

壺・高杯など飾られる土器は、表面に緻密性を持たせ光沢のある土器にするため、半乾きの土器を先の丸い棒でこります。これをミガキと呼んでいます。

土器づくり（粘土から野焼きまで）

土器を飾る

弥生土器は、ヘラや櫛状の工具で様々な文様が描かれました。ヘラ書き文様・彩文は前期、櫛書き文様は中期前半、凹線文様は中期後半に最も発達しました。

前期の文様

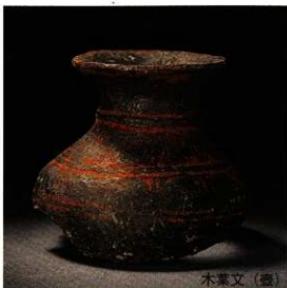
ヘラ書き文様

先の尖ったヘラ状の道具で土器の表面に文様を施しました。木葉文や直線文、流水文などがあります。



彩文

土器の表面を黒く仕上げた後、筆状の道具でベンガラでつくった赤色を使い文様を施しました。



中期の文様

櫛書き文様

草の茎のようなものを2本から10本ほど束ねて、土器に押し滑らせて様々な文様を施しました。



鋸歯文

鋸の歯のように、三角形を幾つも並べた文様です。高杯や器台など「もの」を供える土器に多く施されました。また、規則などにもみられ、邪惡なものを寄せ付けない「結果」の意味があつたと考えられています。



凹線文

ヘラや指先を土器に押し当てる、回転を利用して凹んだ直線を施しました。



土器を使う

弥生時代の人々にとって、土器は生活に密着した用具でした。
それぞれの形の土器は、機能に応じて使い分けられていました。

蓄える

蓋がつく壺で、蓋と壺には紐を通す穴があり、しっかりと締じられるようにできています。

壺の中には、米牛の種粉が大切に保管されていたのでしょう。

煮る

壺は、米などを炊くのに使われた器です。外面には煮沸した時の煤やあきこぼれの跡がみられます。用途重視の飾られない土器です。

注ぐ

木を注ぐ土器には機能的な把手の付く水差形土器があります。

盛る

高环や鉢は、様々な食料を盛りつけるのに使われた土器で、凹線文などで飾られています。

溜める

大形の壺や甕は、水を蓄えるのに使われました。

特殊な土器

近畿地方の弥生土器の多くは、日常生活に使う器でした。このような土器とは別に、まつりの時など特別な用途に使われた土器もありました。



ミニチュア土器

本来の土器の形をそのまま縮小したミニチュアです。



底の四角い土器と異形高坏

土器の底の形は丸いのが普通ですが、中には方形の底をもった土器もあります。



多孔土器

この土器には多数の穴があいており、灰が詰まっていました。口部分には紐穴があり、吊り下げて使うようになってしまっており、液体を濾過するのに使ったものでしょう。



異形高坏の文様

一般的な高坏は円形の坏部ですが、坏部が長方形で仕切のついたものや梢円形の坏部に弧帯文風の文様を描いた特別な高坏があります。

絵画土器

弥生時代中期後半、鹿や建物、人物、舟などの絵画が土器に描かれました。唐古・鍵遺跡からは、約130点の絵画土器が出土し、全国の3分の1の量にあたります。



記号土器

弥生時代後期には、絵画に代わり、直線や曲線を組み合わせた記号が土器に記されました。

これらの土器は、井戸などから完形で出土することから水のまつりに使われたと考えられます。



運ばれた土器

土器の移動を調べることは、その中に入れられていた物やそれを運んできた人々の移動、地域的な結びつきを知ることができます。

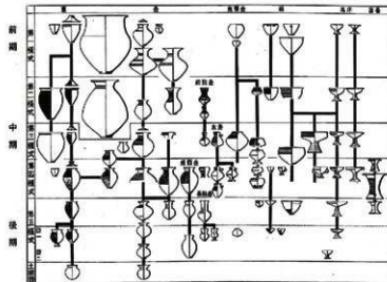
唐古・鍵遺跡では、各地で作られた土器がたくさん出土しています。弥生時代前期から中期中頃にかけては伊勢湾沿岸などの東日本地域の土器が、中期後半は瀬戸内海沿岸の西日本地域の土器が、唐古・鍵遺跡に多く運ばれてきており、それぞれの時代に唐古・鍵遺跡と密接な結びつきをもっていたことがわかります。



土器は時代のものさし

土器は遺跡の時代を決める重要な遺物

土器は、時代のものさしの役割を果たします。土器は、作り手の自由な発想のもとに作られているわけではなく、土器の形や装飾の仕方、作る技術といった事柄はその時代により規制されています。つまり、典型となる土器の様式が作り手の頭の中にあって、その形を目指して作られるのです。その典型となる様式は、世代が移り変わる時や新しい技術が導入された時に少しづつ変化していきます。土器は変化が速く、最も多く出土することから、遺跡や遺物の時代を決める重要な資料になるのです。



小林行雄がつくった弥生土器の縦年図



壺の変化（前期 [左]～後期 [右]）



甌の変化（前期 [左]～後期 [右]）



鉢の変化（前期 [左]～後期 [右]）



高杯の変化（前期 [左]～後期 [右]）

写真提供・協力

- ・熊谷武二
- ・京都大学総合博物館
- ・奈良県立橿原考古学研究所

写真撮影

佐藤右文

イラスト

小栗典子

田原本の遺跡2

唐古・鍵遺跡 Vol.2
土器編

1998年3月31日

編集・発行 田原本町教育委員会

〒636-0392

奈良県磯城郡田原本町890-1

TEL 07443-2-2901

